
国際ワークショップ

「ドストエフスキー 人間論の原理」報告

- ・講演 ヴラジーミル・ザハーロフ「人間の中の人間と小説の中の人間」
- ・エッセイ ヴラジーミル・ザハーロフ「ドストエフスキーの偉大な五書」

翻訳・概要説明 齋須直人

Международный семинар

«Антропологический принцип Ф.М. Достоевского»

- ・ Доклад: В.Н. Захаров «Человек в человеке и человек в романе»
- ・ Эссе: В.Н. Захаров «Великое пятикнижие Достоевского»

Перевод: Наохито Саусу

二〇二三年二月二日に名古屋外国語大学名駅キャンパスで国際ワークショップ「ドストエフスキー 人間論の原理」が行われた。このワークショップは、科研費基盤研究B「危機と再生のヴィジョン ドストエフスキー文学の世界性を巡る地域的研究」(代表者・亀山郁夫)の支援により実現した。

二〇二二年度には、同じ科研費で、国際ドストエフスキー協会会長でアメリカのドストエフスキー研究者キャロル・アポローニオ氏をお呼びし、八月八日にワークショップ「ドストエフスキー——解釈と受容の可能性」、八月一九日に国際ドストエフスキー協会プレシンポジウム「カラマゾフの母たち」(International Dostoevsky Society: Pre-symposium in NAGOYA, «The Mothers Karamazov»)が、いずれも名古屋外国語大学名駅キャンパスを会場に、ハイフレックス形式で行われた。二〇二三年八月には、やはり名駅キャンパスで、ドストエフスキー研究では最大規模の学会である、国際ドストエフスキー協会シンポジウムの本番が行われることになっている。

ワークショップ「ドストエフスキー 人間論の原理」は、ロシアのドストエフスキー研究者であるヴラジーミル・ザハーロフ氏を招き、聴衆はオンライン、主催者・発表者のみ対面のハイフレックス形式で行われた。ザハーロフ氏は元国際ドストエフスキー協会会長で、ペトロザヴォーツク大学教授である。

使用言語はザハーロフ氏はロシア語、他の参加者は日本語だったが、ロシア語については日本語訳を用意し、必要に応じて参加者が聴衆に向けて通訳をした。主な聴衆は日本ドストエフスキー協会の会員や、日本ロシア文学会の会員、ロシアのザハーロフ氏

の教え子の方々とあり、登録者数は百名を超えた。越野剛氏（慶應大学）が司会を行い、会場からの質問のみ口頭で、聴衆からの質問は Zoom のチャット機能により行った。

最初に日本ドストエフスキー協会会長の亀山郁夫氏（名古屋外国語大学学長）が開会の挨拶を行った。第一部はザハーロフ氏による基調講演「人間の中の人間と小説の中の人間」を行った。ザハーロフ氏がロシア語で原稿を読み上げ、聴衆には画面共有で日本語訳を共有した。その後、コメンテーターの越野剛氏と木寺律子氏（京都産業大学）によるコメントがあり、ザハーロフ氏による回答があった。第二部は「多様なドストエフスキー」と題し、日本語で四人が報告を行い、質疑応答と、予めお渡ししていたロシア語訳をもとに、ザハーロフ氏からコメントを頂いた。報告は次の通りである。町田航大（早稲田大学大学院生）「ドストエフスキーとゴリキー」ヨブ記が示す思想的共鳴、齋須直人（名古屋外国語大学）「トゥルゲーネフの詩『花』とドストエフスキーの中編『白夜』」、桜井厚二（早稲田大学）「一九七二年の『悪霊』―日本のメディアにおける一つの伝説」、望月哲男（中央学院大学）「謝罪と許しの形―アメリカとナスタシーヤ」である。第三部ではフリーセクションとして議論を行った。全体として活発なやり取りがあり、盛況であった。

本稿ではザハーロフ氏の基調講演と、ザハーロフ氏の五大長編についてのエッセイ「ドストエフスキーの偉大な五書」を掲載する。エッセイは亀山学長がドストエフスキーの五大長編を完訳した記念にザハーロフ氏からいただいたもので、ワークショップのフリーセッションの時間に配布した。翻訳をするにあたって、望

月哲男氏、番場俊氏、町田航大氏から有益な指摘をいただいた。特に町田氏には全文に渡ってロシア語原文と突き合せた上での詳細な指摘をいただいた。

なお、ロシア語では神や聖母などを表す単語については大文字で書かれるが、このニュアンスが重要となるため、日本語訳ではこれらの語については（〜）で括った。

講演 人間の中の人間と小説の中の人間

ヴラジーミル・ザハーロフ

ドストエフスキーの人間論の原理

ドストエフスキーは人間と世界についての新しい言葉をもって世界文学に加わった。このドストエフスキーの「新しい言葉」について定義する際、批評家たちは「芸術性の謎」や、「生の謎」と諸性格の発見について、芸術における新しい真実の出現について論じた。それらはいかなるものだろうか？

近代哲学におけるヒューマニズムの諸原理はよく知られている。私たちは教科書によってこれらを知っている。「人間は万物の尺度である」、「人間は理性的である」、「自由、平等、友愛」、「人間は幸福を志向する」、「科学と進歩は人間と人類を幸福にする」等々。それでは、人間についてのドストエフスキーの理念はどの程度独創的なものだろうか？

世界の批評において、ドストエフスキーの人間論についての一

種の「紋切型」が出来上がった。「人間は不合理であり、複雑であり、二面的であり、矛盾している。」「地下室」は人間の本質を表現している。」等々。作家自身、同時代人の中に「地下室」を発見したことを誇りに感じていた。「地下室」とは、人間が沈黙している事柄であり、人間が交流において現実化させない事柄のことである。ドストエフスキーの主人公たちは「でたらめ」で、「病的」で、「奇妙」で、「打ちのめされて」おり、奇妙で空想的な人々である。

しかし、人間についての彼の理念はここに述べられたことだけに限定されない。世界の批評においては、ドストエフスキーの人間論の原理はまさにこれに集約されてしまうのだが。

「人間は謎である」

皆が、一八歳の若者だったときの作家の言葉「人間は謎です」を引用する。

人間は謎です。この謎は解かなければなりません、そしてたとえこの謎を解くために一生をかけることになっても、時間を無駄にしたとは言わないでください。僕はこの謎に取り組んでいます、なぜなら人間でありたいからです。[DI/8, 15:1]

33]

しかし、作者自身も批評家たちも、なぜ人間であることを欲するためこの謎に取り組む必要があるのか、説明しない。この言葉の背景に何があるのか？ なぜ人間であるために「人間の謎」

を究明する必要があるのか？

多くの批評家がそうと確信していたにも関わらず、ドストエフスキーは自分が心理学者であるということを否定している。このことについて彼は晩年に創作ノートで書いている。「人々は私のことを心理学者と呼ぶ。そうではない、私はただ最高の意味におけるリアリストである、つまり、人間の心の全ての深奥を描く」[PFA/III, Φ. 212.117. C. 29. : 最初に出版されたのは次の文献：DI/883, 1, 373]。

この引用においてはどの言葉も謎かけである。人間の心理活動を描写する心理学者とは異なり、彼は「最高の意味におけるリアリスト」であり、「人間の心の全ての深奥」を描く。全ての深奥とはいかなるものか？

「人間の中に人間を見つけること」

同じ創作ノートの中でドストエフスキーは次のように記している。

完全なリアリズムのもとで人間の中に人間を見つけること。これは主にロシア人の性格であり、この意味で私はもちろん民族的である、(なぜなら、私の方向性は民衆の〔^{ナロド}キリスト教〕の精神の深奥から流れ出ているからである)。

「人間の中に人間を見つけること」が「主にロシア人の性格」であるという彼の告白は何を意味するのか？ なぜこれが「ロシア人の性格」なのか？ それなら、他の民族においては事情が異なる

るといふのか？ この問題が全ての民族の関心と呼び出すものであることは明らかではないか？ それならばどこに違いがあるのか？ なぜ「この意味で」ドストエフスキーは「もちろん民族的である」のか？ なぜこの彼の方向性が「民衆の（キリスト教）の精神の深奥から流れ出る」のか？ なぜ「人間の中の人間」の探究が「民衆の（キリスト教）の精神の深奥」という「源泉」を持つのか？ そのうえ、なぜここで〈キリスト教〉なのか？ 「人間の中に人間を見つめる」とは何を意味するのか？ 「人間の中の人間」といふ表現に含まれる意図的で挑発的なトートロジーはいかなるものなのだろうか？

ドストエフスキーの創作と詩学の鍵となる概念は「人間」である。それは「共通人」や「全人」といった概念と関連している。

「共通人」とは誰か？

ドストエフスキーは、人間共通の関心や志向を高く評価しながらも、彼が「共通人」と呼んだ人々に対しては批判的だった。これはピョートル大帝の改革の結果現れたロシア人の独特な典型である。なによりも民族的であるイギリス人、ドイツ人、フランス人と異なり、ロシアの「共通人」は誰にでもなろうとするが、ただロシア人にはなろうとしない。共通人は民衆を蔑み、そして、概してロシアを憎む。「共通人」であるということは、根を持たず、土壌を持たず、抽象的なヨーロッパ人になるということである。ドストエフスキーの印刷されたテキストにおいて、この言葉はこのかたちで、あるいは変化したかたちで比較的頻繁に使用されている。

- ・「共通人 Общечеловек」一六回（一八六三年以降）
- ・「共通人である」(Общечеловечность)二四回（一八六一年以降）
- ・「共通人性 Общечеловечество」二回（一八六一年以降）
- ・「共通人的な Общечеловеческий」六七回（一八六一年以降）
- ・「共通人の Общечеловечный」九回（一八六二年以降）

この言葉が唯一肯定的に使用された文脈がその否定的な意味を裏づける。一八七七年の『作家の日記』三月号において、ドストエフスキーはミンスクにおける、医師ギンデンブルクの葬儀について語った。「ところで、なぜ私はこのご老人の医師を「共通人」と呼ぶのでしょうか？ この人は共通人ではなく、むしろ共通の人でした(Эго был не общечеловек, а скорое общий человек)』[Д18, Д:83]。この信仰者は貧しき人々、つまり、ユダヤ人、ロシア人、ベラルーシ人、ポーランド人、全ての人を治療し、助けていた。ロシア人たちの使命は別のイデーにも含まれている。「ロシア人の理想は、全てを統一する性質、全てを和解させる性質、全人性にある」[Д18, 4:387]。次の引用で述べられているように、ここにロシア人の「最も偉大な使命の中でも最も偉大なもの」がある。

我々には二つの祖国がある。我々のルーシとヨーロッパであり、我々が自分たちをスラヴ派と呼ぶ場合でさえそうなのだ（彼らにこのことで私を怒らないうてもらおう）。これに反論する必要はない。既に（ロシア人たち）によって自分たちの未来の中に意識された最も偉大な使命の中でも、最も偉大なものは、人類に対する全般的な奉仕であり、それはロシアに対してだけでなく、スラヴ人たち全般に対してだけでなく、

全人類に対しての奉仕である。[J18, 11:423]。

「全人」とは誰か？

「全人」という言葉は、印刷されたドストエフスキーのテキストにおいては一度だけ使用される（一八八〇年）。しかし派生語をより考慮に入れてみよう。

- ・「全人的な всечеловеческий」一六回（一八六〇年以降）
 - ・「全人である人」と всечеловеческий」九回（一八六一年以降）
 - ・「全人の всечеловеческий」一回（一八八〇年以降）
 - ・「全人性 всечеловечество」一回（一八七六年以降）
- 「全人」という言葉は作家の創作ノートにおいては二度登場する（一八七六年二月と一八八〇年一〇月）。

「全人的な」は鍵となる形容であり、「全人性」や「全人であること」は一八六〇年から七〇年代のドストエフスキーのジャーナルズにおける論争で絶えず生じる概念である。「全人的な」という形容詞があったのであれば、名詞もあったと推定するのは理にかなっている。

「全人」とは一九世紀のロシア語では珍しい言葉である。それは今も多くの現代ロシア語辞典に存在しない。

現代の神学においては、最初の人間アダムのことを全人と呼ぶ。アダムは自分の中に全ての人を含んでいる。（キリスト）は大文字のこの言葉で呼ばれている。この教えの原典は使徒パウロの言葉である。「アダムによって全ての者が死ぬように、（キリスト）によって全ての者が生き返る」（コリント人への第一の手紙 十五章 二二）。

この二つ目の意味において、「全人」という言葉はニコライ・ダニレフスキーの本『ロシアとヨーロッパ』（一八六九）の中に見られる。「ただ一人の（全人）がいた——そして（その方）は（神）であった」¹。

ダニレフスキーとは異なり、ドストエフスキーは「全人」という言葉を小文字で、真のキリスト教徒という意味で用いている（キリスト）対キリスト、キリストたち）（Христос vs христос, христы）。彼はこの言葉の意味をロシアの文学と哲学に導入した。

プーシキン講演

「全人」という言葉は、一八八〇年六月八日にスピーチが行われた、プーシキン講演の秘められた意味を次のようにきわめて明瞭に表現している。

「真のロシア人になること、完全にロシア人になることはおそらく、もっぱら（結局、これを強調してもらいたいのです）が、全ての人々の兄弟になること、もしも望むなら「全人」になることを意味します」[J18, 12:330]。

ドストエフスキーはこの考えが何を意味するのかを詳しく説明した。

……もはや決定的にヨーロッパの諸矛盾に和解をもたらすこと、自分たちの全人的な、全てを一つにするロシアの心において、ヨーロッパの憂鬱に対して出口を示すこと、その心の

中に兄弟愛によって全ての兄弟たちを包み込み、おそらく最後に偉大な共通の調和の最終的な言葉、〈キリスト〉の福音の教えによって、全ての諸民族が決定的に兄弟として連帯する言葉を宣言しもすること [Y18, 12: 30]。

ドストエフスキーは、民族性を否定することの中に、「全てが一つの形式に、一つの共通の典型に一体化すること」に対して期待をすることの中に「最も極端に発展して、ほんのわずかの譲歩もない西欧派」を見出した。一方の〈キリスト教〉は別の課題、つまり「新しい、前代未聞の民族性——全兄弟の、全人の、共通の全地〈教会〉の形式における民族性」を与えている。

ロシア人であることは、全人になることであり、キリスト教徒であることである。

ドストエフスキーの人間論はキリスト教的なものである

学問的な定義において、ドストエフスキーの人間論は「キリスト教的」なものである。ドストエフスキーの考えでは、各人の中には〈神〉の像があり、〈神〉の像をかたちづくり、神化し、再生し、それによって「人間を人間にすることができ。ドストエフスキーは自分の作品の語彙の註釈において「かたちづくる」という言葉の意味を説明している。

かたちづくること、民衆の言葉。つまり、像を与え、人間の間に人間の像を再生すること。「人間をかたちづくる」「君がせめて自分をかたちづかっていれればなあ」と言われる。例え

ば、長いこと飲酒に耽っている者に対して。懲役囚たちからも耳にした [PFAIII, φ. 212.1.15. C. 88]。

ドストエフスキーにおける人間は自分の中に、実現可能な〈創造主〉と創造の完全さを持っている。

コンスタンチン・レオンチエフは「全人」という言葉の意味を理解せず、彼の評価によるところの「ぞっとする全人」を共通人、ヨーロッパ人、リベラル、コスモポリタンとして提示しようとした。^②このすり替え(「全人」の代わりに「共通人」)は二〇世紀の文学と哲学の批評において典型的だった。〈全人〉についての神学教義はセルゲイ・ブルガーコフ^③やセルビアの聖ニコライ^④の著作で究明されている。ドストエフスキーの全人についての啓示は聖ユスティン(ポポヴィチ)の本『ヨーロッパとスラヴ民族についてのドストエフスキー』^⑤で与えられている。

ドストエフスキーの存在論の原理

よく知られたヒューマニズムの原理「人間は万物の尺度である」とは異なり、ドストエフスキーの人間論の原理は存在論的なもの、つまり「〈キリスト〉は万物の尺度である」である。

例えば、ドストエフスキーは『罪と罰』の自分の、作者のアイデアを次のように表現している。

長編のイデー

|||

〈正教〉の視点

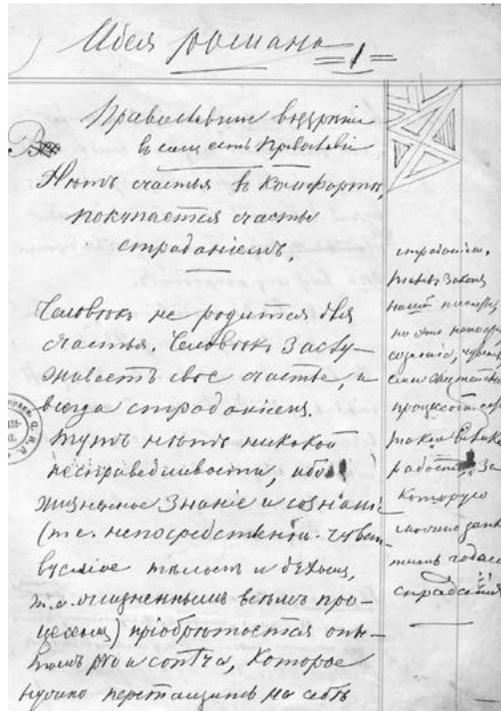
この中に〈正教〉がある

快適な状態の中に幸福はない、

幸福は苦悩によって獲得される。

人間は幸福のために生まれるのではない。

人間は自分の幸福に値する、そして常に苦悩によって。



【『罪と罰』の創作ノートの断片 (PJA/III, 212.15. C.3)】

誰が快適な状態をないがしろにする用意があるだろうか？ 誰が苦悩することを欲したり、愛したりするだろうか？

ドストエフスキーにとって生きることとは苦悩することであり、

書くためには苦しむ必要があり、快適な状態の中に幸福はなく、幸福は苦悩によって獲得される。

『ポケットの中の黄金時代』

ロシアの批評では誤解されているが、ドストエフスキーの作品には「小さき人々」も「余計」人もいない。ドストエフスキーの主人公たちはしばしば「小さき人々」と呼ばれる。社会的な視点からはこれはおそらく正しいが、存在論的な意味においてはそうではない。「小さき人々」も「余計人たち」も原理的に彼の世界ではあり得ない。あらゆる主人公が偉大である。

誰が自分のことを私は天才である、私はシェイクスピアであると言っているか？

ドストエフスキーは、あらゆる人には「ポケットの中の黄金時代」があると見なしていた。

ドストエフスキーの一八七六年の『作家の日記』には「ポケットの中の黄金時代」という章がある。ドストエフスキーは、先に芸術家のクラブでの子供たちのヨールカ祭りについて述べてから、「父たちの舞踏会」について、息苦しい舞踏場で大人の客たちがいかに楽しんでいるかについて語る。この「凡庸さ」の光景に際し、作家の頭に「ある幻想的でこのうえなく途方もない考え」がよぎる。もしも彼らが「せめて一瞬でも嘘偽りなく、純朴になる」ことができたならば？ と。

作家が確信しているところでは、一人一人の中で沢山の「率直さ、誠実さ、最も心からの快活さ、清廉さ、寛大な感情、善良な願望、知性、いや知性どころではない！ 最も気のきいた、人好

きのする機知」が「それらが一人一人の中で決定的に、一人一人の中から」現われ、「あなた方の一人一人がヴォルテールよりも賢く、ルソーよりも感受性があり、アルキビアデスや、ドン・ジュアン、ルクレティウス、ジュリエット、ベアトリーチェよりもはるかに魅力的である」[J18, 11: 284-285]、¹⁾とが明らかになる。

そのうえ、「今、まさにこの瞬間、あなた方の間に、まさにこの舞踏場で見つかりうるような魅力的なものは、シェイクスピアにも、シラーにも、ホメロスにも、もしも彼らを全員一緒にまとめても見つからない」[J18, 11: 285]。

ドストエフスキーは声を大にして言う。一人一人が「ヴォルテールよりも賢く、ルソーよりも感受性があり」、世界の文学や歴史で最も魅力的な主人公たちよりも魅力的である。シェイクスピアにも、シラーにも、ホメロスにも、それらを一緒にしても、この舞踏場の俗悪な客たちの中にあるものは見つからない。一人一人がホメロス、シェイクスピア、シラーを超えることができる、もしも嘘偽りなく純朴になれば。

あらゆる人が天才であり、あらゆる人がシェイクスピアなのである！ この章の意義は、ドストエフスキーの創作と、詩学の特性の意味を理解するためにとりわけ重要である。全ての登場人物は作家と同等であり、全ての人たちは哲学者たちであり、全ての人たちはドストエフスキーたちである。

彼はどのように「人間の中に人間を見つけ」、全人を見つけるという自分の創作目的を実現したか？ この問いに答えることはほとんど不可能だが、提起された諸問題について議論することだけはできる。もしも、人間の本性についてのドストエフスキーの

直接的な発言を集めるならば、それらは沢山あって広範にわたるが、独特の哲学論文ができあがる。

この要約の中の鍵となるテクストはドストエフスキーの「四月一日。マーシャは机の上で横たわっている。マーシャと会えるだろうか？」という一八六四年の有名なメモである。このメモの主要なテーマは、神の性質と人間の性質について、〈キリスト〉とキリスト教について、人間と人格^{リーナナス}の過渡的な性質について、生と死について、人類の未来についてである [PTB, Φ. 93.1.27, C. 41]。

ドストエフスキーにおいてはしばしばテクストはテクストを説明する。作家自身が人間の謎を解明していることも珍しくない。

「……あらゆる人間は〈神〉の像を持っている、〈神〉の像と克を。」 [J18, 3: 175]

「キリスト教」は人間の中に〈神〉が含まれうるということの証明である。これは人間の最も偉大なイデーであり、人間が達成できた最も偉大な栄誉である。」 [PTAIII, Φ. 212.1.16, C. 176]

「〈神〉が人間を見い出す道は不可知である。」 [PTAIII, Φ. 212.1.5, C. 145]

「人間には自分を救う力はないが、啓示と、その後には〈キリスト〉によって救われる。つまり、生への〈神〉の直接的な関与によって。」 [PTB, Φ. 93.1.5, C. 31]

「……十戒を遂行せよ、そうすれば偉大な人間になるだろう。」 [PTAIII, Φ. 212.1.13, C. 66]

「……人間の分裂状態は（……）人間の破滅である。」 [PTAIII, Φ. 212.1.15, C. 107]

「人間の顔はその人間の人格^{リーナナス}の、霊の、尊厳の像である。」 [PTAIII, Φ. 212.1.15, C. 107]

Φ. 212.1.15. C. 118]

「人間は自分たちの科学よりも広大である。」[PTAIII. Φ. 212.1.15. C. 131]

「誠実な人間であることは何よりも益がある。」[PTAIII. Φ. 212.1.15. C. 186a]

「文学的な理想は民主主義者である。民衆の——善良な人間という理想はより良い。」[PTAIII. Φ. 212.1.15. C. 103]

これらは無作為に選び取ったものだが、ドストエフスキーの思想の傾向を明らかにする。ドストエフスキーは自分の人間学のイデーを、芸術作品における分析対象にし、作者と主人公たちの反省と反省の対象にした。

『貧しき人々』

この作家の初期作品はすでに読者にとっての人間の発見となった。ドストエフスキーは自分の最初の長編小説『貧しき人々』の中で、ペテルブルク叙事詩『分身』の中で何を発見したのか？ ジェーヴシキンは不幸であるか？ 長編は次の文句で始まる。「昨日私は幸せだった、あまりに幸せだった、これ以上ないほど幸せだった。」(VII, 1: 11)。ここで話題になっているのはただ主人公たちの島での散歩についてのことのみだが、彼らの感情はこれに劣らず意義深く、本物である。

長編では貧しき人々の災難や苦悩だけでなく、幸福のことも話題となる。彼らの喜びが現われるのは日常の面倒事において、愛において、自然を観察することの中で、お互いの交流の中であり、マカール・ジェーヴシキンにとってはさらに創作の中におい

てである。

自分の主人公たちを詩人、恐れを知らぬ勇敢な戦士、気高く猷身的な人々としてイメージした作家たちは少なくなかった。だが、ドストエフスキーにおいてはそうではなかった。

女主人公は最初から主人公よりも洗練されており、教養があり、文化的である。彼女は結局までそのようにあり続けている。マカール・ジェーヴシキンは教養がなく、文化的でなく、彼が自分で認めているように「愚鈍」だが、小説の中で変容していく、彼は新しい人間である。彼の変化において鍵となる役割を果たしているのが文学である。彼はヴァーレニカへの手紙の中で自分を意識し、口に出され、書かれたことは彼が自分と他者を理解することを助け、愛が彼を高める。言葉の中に「トナリ」人格、主人公の自意識が生まれ、言葉と〈言葉〉において人間が霊的に生まれ変わる。

最初はマカール・ジェーヴシキンは経験が浅く、手紙を書くことができないこと、自分には文体がないことについて愚痴を言っているし、彼には考えや感情を言葉に述べるのが困難である。しかし、時間の流れとともに彼は言葉の能力を獲得し、自分に文体が現れていることに気づく。もはや彼は楽しみのために書き、彼にとって手紙は喜ばしいものである。彼の手紙はもはや純粹に文学的機能を獲得する。主人公は描写するために書き始めるのである。彼はただ述べるためだけでなく、書くことへの欲求によって書く。言葉の能力という恵みは人間を高める。ドストエフスキーは、既に最初の小説で単にこのイデーを宣言するのではなく、生き生きとした矛盾、突然の詳細さ、はっきりしない俗悪な日常の中で才能の誕生と発達を示している。

主人公たちの文通の中で、マカール・ジェーヴシキンの最後の手紙——住所と日付のない手紙がとりわけ意味深長である。全てが起こってしまった後に、なぜ書かなければならないのか？ ヴァーレニカは嫁ぎ、文通は打ち切られ、長編の筋書きは完遂した。しかし、マカール・ジェーヴシキンはこの手紙を書く。それは生活の実用を欠いている。手紙はマカール・ジェーヴシキンの創作行為である。この主人公は外見上は以前の九等文官に留まるが、異なる人間になった。つまり、作家、「詩人」、著作家になったのである。主人公において長編は、世界を創り、人間を創る〈言葉〉の啓示を示している。

ドストエフスキーの発見は文学と人間についてのおなじみのイメージをひっくり返した。ドストエフスキーの主人公たちは胸に秘めたものがある、彼らは自分の心に謎を持っており、彼らの謎は包み隠されていない。彼らは恥ずかしそうにお互いに、そして読者たちに理解できる言葉、キリスト教の愛の言葉で語る。その結果逆説的な葛藤が生まれる。例えば、チャツキー、オネーギン、ペチョーリン、アンドレイ・ボルコンスキー、あるいはピエール・ベズーホフがそうであったように、マカール・ジェーヴシキンよりも賢く教養があるということは可能である。例えば、プーシキンの作品の理想的なタチャーナ・ラーリナのように、ドストエフスキーの書簡体長編の主人公である彼よりも非の打ちどころがないことも可能である。それでもやはり、マカール・ジェーヴシキンの性格と人格には何か、彼をロシアだけでなく世界の文学の多くの主人公たちよりも重要にするものがある。

マカール・ジェーヴシキンはドストエフスキーの偉大なイデー

の最初の啓示だった。つまり、人間の「回復」、貧しき人々と虐げられた人々からカラマーゾフの兄弟にいたるまでの霊的復活のイデーである。

ドストエフスキーは『分身』においてもこれと同じイデーとこのキリスト教の人間論の原理を守っている。それぞれの人間は自分の中に〈神〉の像を持っている。同一の人々はいない、一人一人が比類なく、一人一人が唯一無二である。ある人を別の人に取り換えることは、オリジナルをコピーですり換えることは許しがたい。俗悪で、不器用で、目先の利かないゴリヤートキン氏もまた「あなたの兄弟」であり、私たちの兄弟であり、彼もまた共苦、慈悲、愛に値する。主人公が明らかに端正さがなく、いくらか醜悪であるにもかかわらず、ドストエフスキーはこの役人の中の「人間の中の人間」を、その理想の本質を、我々一人一人の中にある〈神〉の像を守っている。

ドストエフスキー自身が強調しているのは、ゴリヤートキンは「最も重要な地下室タイプ」[PTAIII, Φ 212.1.11. C. 171]であるということ、現代人の中に地下室を発見したということであり、彼はこの発見を誇りに思っている [M18, 15.1: 259]。

『地下室の手記』

中編小説『地下室の手記』における人間論の原理は世界文学のみならず、世界の哲学の事件となった。その特別なテーマは、ヨーロッパ哲学における合理的な人間概念に対する批判であり、「医師たち——社会主義者たち」との、チエルヌイシェフスキーとその追隨者たちとのドストエフスキーの論争であった。ドストエフ

スキーの観点からすれば、チエルヌイシェフスキーの「哲学における人間論の原理」と彼の「理性的エゴイズム」の理論は大変なイープなものだった。チエルヌイシェフスキーは次のように述べている。

……あらゆる事柄は、良いものも悪いものも、高潔なものも低劣なものも、英雄的なものも、小心なものも、全ての人間の中では一つの源泉から生じる。人間は自分にとってより心地よいように行動し、打算に従い、より大きな利益や満足を得るために、より少ない利益や満足を命令するものに対して拒否する。⁶⁾

あるいは、「あらゆる人間の志向の目標は享樂を得ることにある」⁷⁾。

ドストエフスキーには異なる人間理解があった。

そういうわけで、中編『地下室の手記』のはじめに、あらゆる矛盾が集められているかのように思われる。意地悪である／意地悪でない、病んでいる／病んでいない、というように。この際限ない否定の否定の背景には何があるのだろうか。「私は病んだ人間だ……。私は意地悪な人間だ。人好きのしない人間だ」……等の背景には？ そして結局、「私はただ意地悪なだけでなく、何にもなることもできなかった。意地悪にも、善良にも、ろくでなしにも誠実にも、英雄にも、昆虫にも。」[118:6-78]と続く。

ドストエフスキーの主人公は複雑で、矛盾しており、二面的であり、ときどき自分で自分のことが不可知であり、読者にとって

だけでなく、作者にとっても予見できない。主人公には常に秘められた「突然」がある、それは意見や行動における思いがけない「激変」、「信条の生まれ変わり」、人格の変容である。

主人公は言葉において全部を述べ尽くすことはないが、もしも述べ尽くすならば、彼の言葉は嘘である。そしてそうでありながらも、「人間は受肉した〈言葉〉である、人間は意識し言葉を発するために現れた」[11711:Φ.100.2444.C.37]。〈キリスト〉に倣い、人間は「受肉した〈言葉〉」である。

ドストエフスキーの総合においては、〈神〉、〈キリスト〉、〈言葉〉、人間、人格、創造、理想が一つに溶け合っている。他の作家たちにおいては、主人公はしばしば作者よりも小さいが、ドストエフスキーは普通の人間の偉大さを示す力があつた。

一人一人の主人公が計り知れず、重要であり、それぞれが自分の〈顔〉を持つ。ドストエフスキーは、この謎の理解を彼の偉大な先行者たち——シェイクスピアとバルザックから学んだ。

それではドストエフスキーとは一体何者なのか？

ドストエフスキーが文学の世界で榮譽を受けていた年月、批評家たちはこの作家を相反する仕方で称賛し、非難した。

- ・「残酷な才能」(ニコライ・ミハイロフスキー)⁸⁾
- ・「ロシア革命の預言者」(ドミートリー・メレシユコフスキー)⁹⁾
- ・「意地悪な天才」(マクシム・ゴーリキー)¹⁰⁾
- ・「明るく、生きる喜びに溢れた」(オスカル・フォン・シュルツ)¹¹⁾
- ・「全人」(ドストエフスキー、聖ユステイン)¹²⁾
- ・「使徒」(オスカル・フォン・シュルツ、聖ユステイン)

誰が正しいか？ 私だったら、ドストエフスキーは何者かという問いへの回答は次の三つを選ぶ。

- ・「明るく、生きる喜びに溢れた」（オスカル・フォン・シュルツ）
- ・「全人」（ドストエフスキー、聖ユスティン）
- ・「使徒」（オスカル・フォン・シュルツ、聖ユスティン）

人間の謎についての〈言葉〉と言葉

ドストエフスキーの小説『悪霊』には注目に値するエピソードがある。革命の悪霊の一人であるピョートル・ヴェルホヴェンスキーは、ニコライ・スタヴローギンに、二、三日前に歩兵士官と一緒にいたときに起きたことについて語っている。

「我々は無神論について話し、もちろん〈神〉をこきおろしました。我々は喜んで、甲高い声で騒ぎました。ところで、シャートフは、もしもロシアで反乱を始めるならば、必ず無神論から始めるようにと断言しています。もしかすると正しいかもしれません。ある白髪の威張り屋の大尉がただ座り続け、ずっと黙って一言も話さずにいたが、突然部屋の真ん中で立ち上がって、それでね、大声で独り言のように「もしも〈神〉がいらないならば、そうなったら俺は一体どんな大尉だというのだ？」と言ったんです。そして帽子を取り、両手を広げ、出て行きました。」

「かなり一貫した考えを表現しましたね」ニコライ・フセヴォロドヴィチは三度目の欠伸をした。[D18:9:160-161]

ニコライ・スタヴローギンの落ち着き払った反応にもかかわらず、「白髪の威張り屋」の、つまり勤め上げた兵隊の将校の考えは逆説的である。実際、なぜ無神論が国家と職位を不可能にするのか？ なぜ〈神〉がいなければ彼は大尉ではないのか？ なぜ〈神〉は世界の国家機構の、そして国家に限らないものの基礎なのか？ このテーマの他のヴァリエーションは次の通り。もしも〈神〉がいなければ、「徳はない」、「不死はない」、「全てが許される」、「全てが容認される」。一神教の文化においては無神論は道徳を否定し、破壊する。

ドストエフスキーにはほとんど宗教的な創作理念があった。告解における司祭のように、この作家は自分の主人公たちの聴罪司祭であり、彼らの罪は彼の罪となり、彼の十字架の重みを増させる。自分の罪を主人公たちと作者はまさに創作行為によって許そうとする。つまり、告解によって、痛悔によって、自分と他人の罪を贖うことによつて。

後に、このイデーはゾシマ長老の奉仕と教えの中に表現された。自分を他者の罪の被告人とすること。全ての人に罪がある。一人一人に自分の大きさの罪がある。ある人々が行ったことに罪があり、他の人々が行わなかったことに罪がある。見せかけの無罪は単に錯覚である。一人一人が世界の悪に対して責任がある。「あらゆる」人間の霊的復活と救済は可能である（サウロのパウロへの改宗）。

ドストエフスキーの人間論の原理は哲学、宗教、芸術において普遍的である。作家は思考の新しいタイプを示した。ドストエフスキーは、主人公たちのイメージと考えの中では、逆説的であり、

アンチノミー的である。バフチンはドストエフスキーの作品のことを「言葉に向けられた言葉」と名づけた。言葉は相対的であり、「宣言された考えは嘘」であり、「真実に達するまで嘘をつくことができる」が、しかし相対的な言葉の中には常に〈絶対者〉がいる。それぞれの人には自分の真実がある。真実のことは沢山あるが、真理は一つである。言葉は全てのことについてのものでありうるし、主人公たちは沈黙することもあるが、彼らのおしやべりと沈黙の中には常に〈言葉〉がある。その〈言葉〉は〈神〉からのものであり、〈神〉である。

ドストエフスキー以前にも、よく知られているように、ディオゲネスが人間を探していた。日中に松明を持って歩き、人々からの質問攻めに対し「人間を探している」と答えていた。〈神〉の像を人間の中に発見したのが〈キリスト〉である。ドストエフスキーは人間と、人間の中の人間を探していた。人間の中に〈神〉の像を探して発見しようとし、全人を発見しようとし、その中に〈キリスト〉を見つけようとしていた。

注

- (1) *Данилевский Н. Я.* Россия и Европа // *Заря*. 1869. № 3. С. 33-34.
 (2) *Леонтьев К. Н.* О всемирной любви, по поводу речи Ф. М. Достоевского // *О Достоевском. Творчество Достоевского в русской мысли 1881-1931*: Сб. статей. М., 1990. С. 22.
 (3) *Булгаков С. В.* Свет Невечерний: Созерцания и умозрения. Сергиев Посад, 1917. С. 347-348.
 (4) *Николаиц, еп.* (Велимирович). Речь о Свечевеку. Београд, 1920 (ヤヌシュチ).

(5) *Иретиц, прп.* (Попович). Достоевский о Европе и славянстве. СПб., 1998. С. 238-270.

(6) *Чернышевский Н. Г.* Антропологический принцип в философии. «Очерки вопросов практической философии». Сочинение П. Л. Лаврова. Статья II // *Современник*. 1860. Т. LXXXI. Май-Июль. С. 35.

(7) Там же. С. 39.

(8) *Михайловский Н. К.* Жестокый талант // *О Достоевском. Творчество Достоевского в русской мысли 1881-1931*: Сб. статей. М., 1990. С. 59-63.

(9) *Мережковский Д. С.* Пророк русской революции // *О Достоевском. Творчество Достоевского в русской мысли 1881-1931*: Сб. статей. М., 1990. С. 86-118.

(10) *Горький М.* Собрание сочинений: В 30-ти т. М.: ПИХЛ, 1953. Т. 24. С. 147.

(11) *Шульц О.* Светлый, жизнерадостный Достоевский: курс лекций / отв. ред. В. Н. Захаров; коммент. В. Н. Захарова, А. Е. Кундлицкого. Петрозаводск: ПетрГУ, 1999.

(12) *Иретиц, прп.* (Попович). Достоевский о Европе и славянстве. СПб., 1998.

略記

Д1883 - Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений. Т. 1. Биография, письма и заметки из записной книжки. СПб, 1883. [838 с.: 332+376+122+81.

Д18 - Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений. В 18 т. М., 2003-2005. Т. 1-18.

Д30 - Достоевский Ф. М. Полное собрание сочинений: В 30 т. Л., 1972-1990. Т. 1-30.

РГА. III - Российский государственный архив литературы и искусства.

ドストエフスキの偉大な五書

ヴラジーミル・ザハーロフ

ドストエフスキは生きている。あらゆる瞬間に世界の様々な国で彼の作品が読まれ、彼の作品の映画や劇が観られている。このプロセスにおいて重要な役割を演じているのが翻訳だ。

翻訳は普遍的なものだ。それは共通の性質を持っている。一昨日は二〇二三年二月一九日で、日曜日〔訳者註―同じ語で「復活」を意味する〕だった。あらゆるスラヴ語において、週の七日はニエデーリヤと呼ばれている。ロシア語においてもそうであったが、古い時代からこの日はキリストの復活を祝して名づけられるようになった。ロシア人たちの生活の中で、誰がこの日の名を変えたのだろうか？

ドストエフスキは民衆が言葉のイデーと意味を与えると考えていた。プーシキン講演に関する論争の中で、彼は次のように書いている。

「我々の民衆がせめて単にキリストを担う者たちである間は、彼らはただキリストのみを頼りにしている。彼らは自分たちのことを百姓крестьянин（крестьянин）、つまりキリスト者христианин（христианин）と呼ぶのだが、ここには単なる言葉があるのみならず、彼らのあらゆる未来へのイデーがある」。

ロシア語を含むあらゆるスラヴ語において、「農奴」холод「奴隸」раб「農夫」という言葉がある。それぞれを百姓крестьянин（キリスト者）と名づけることで、民衆の意識の中でどのような変革が起きたはずであ

ろうか？（「百姓」という言葉が「ルーシにおける低い社会階層に属する人物。百姓、農民」という意味で最初に用いられたのは、およそ一四三〇―一四四〇年と記録されている）。そのようにロシア語のシソーラスや文化コードは出来上がっている。「ありがとう」が「ありがとう神よ」という意味であったり、「さようなら」の代わりに「お許しください」を使う等々。

ドストエフスキは外国語への翻訳だけではなく、ロシア語からロシア語への翻訳においても求められている。それは手稿から印刷への翻訳に始まり、印刷からマルチメディアのテキスト、つまり、オーディオ、ビデオ、デジタルへの翻訳まで。一五〇年かけて、特に最後の一〇〇年で、ロシア語の文字体系、正書法、句読法が変化した。言語の変化はドストエフスキの作品の意味も歪める。最もあますところなく、ソ連時代のテキスト校訂学の欠点と、しかし同様に成果が提示されたのは、アカデミー版ドストエフスキ全集三〇巻本（一九七二―一九九〇）においてだった。作品の作者ドストエフスキが残した本来のテキストが被った歪曲が修正され始めたのは、一九九五年におけるペトロゾヴォーツクのドストエフスキ全集カノン版テキストの確立からであり、これは著者ドストエフスキが依拠していた正書法と句読法で活字化している（一〇巻まで、一一冊が刊行された）。この仕事は新しいアカデミー版ドストエフスキ全集三五巻本で大規模に続けられている（一一巻まで刊行された）。それらの成果となるのは、修正された作家による印刷と手稿のテキストであり、これらが今度外国語への新しい翻訳を誘い出すだろう。これは必然である。ドストエフスキは原理的にあらゆる言語に翻訳される。逆

説的だが、事実、不成功の翻訳ですら、天才の世界的な名声を害さない。一〇〇年も昔の多くの翻訳はロシア語からではなく、仲介となる言語から、しばしばフランス語から、まれにドイツ語から行われたが、そうした翻訳においてすら、ドストエフスキーはドストエフスキーのままであった。

あらゆる翻訳とは解釈である。批評の刊行物、戯曲の上演、映画化も解釈である。

翻訳はドストエフスキーのテキストの本体を拡大し、それが先へ進むほどより大きくなる。翻訳は必然である。テキストの翻訳の意味が作家のオリジナルなテキストに接ぎ木されるのは必然である。

なぜ新しい翻訳が必要なのだろうか？

最近、作家の生誕二〇〇年記念に、なぜ若者たちがあまりドストエフスキーを読まないのかについて、エヴゲーニー・ヴオドラスキン〔訳者註―中世ロシア文学の研究者で作家。代表作『聖愚者ラヴル』には邦訳がある〕による考察を聴く機会があった。この作家の考えでは、翻訳と異なり、ドストエフスキーの言葉は古くなったが、翻訳は現代語で読まれるからだということだ。これには賛成できない、これは誇張である。ドストエフスキーのロシア語は時間の経過に伴って遠くに去ったわけではない。それは高学年のどの生徒にも理解できる。学校の生徒たちが、膨大なテキストを嫌がっており、準備しなければ作家のオリジナルの詩学を理解できず、複雑で逆説的なテキストを読むことに困難を感じており、膨大な哲学的な対話を放り出すことは、それとは別問題だ。年齢や経験とともに、彼らはこうした短所を通過する。

ドストエフスキーの新しい翻訳はなぜ行われるのか？ 正しい意味を追求するためだけではないのは明らかだ。ドストエフスキーは現代的である。彼の小説の題材は、バフチンの言葉によって述べるならば、「生成しつつある現実」であり、「出来上がっていない現在」である。ドストエフスキーは現代作家である。

亀山教授はこの作家の五つの主要な小説を翻訳した。これは大仕事であり、巨大な出来事だ。

ドストエフスキーは自身が小説と名づけたものでは――一作品を書き、そのうちの五つが最も世界で有名になった。それは、『罪と罰』、『白痴』、『悪霊』、『未成年』、『カラマーゾフの兄弟』である。五書〔訳者註―ドストエフスキーの五大長編は、ロシア語では「偉大な五書（ベリーカエ・ピヤチクニージェ）」と書く〕とは、直接的な意味においては五つの書であり、聖なる意味においては、旧約聖書の五つの聖典、つまり『創世記』、『出エジプト記』、『レビ記』、『民数記』、『申命記』であり、それらはユダヤ教において『トーラー』を構成する。

研究者たちはドストエフスキーの最後の小説群を比喩的な意味で聖なるものと名づけたのである。

同時代人は『地下室の手記』に注意を払わなかった。アポロン・グリゴリーエフだけが友人として作者に「君はこのようなものこそ書いていきたまえ」と指摘した。後にレフ・シエストフは『地下室の手記』を五書（五大長編）の一つに加え、新しいテキストの集成を六書と名づけた。

レフ・トルストイはロシア文学の全ての作品よりも『死の家の記録』を評価した。一八八〇年九月二六日に彼はニコライ・スト

ラーホフに書いている。「プーシキンを含めて、あらゆる新しい文学でこれよりも良いものを知りません。調子ではなく、視点が驚くべきものなのです、心からの、自然な、キリスト教的な視点です。優れた、教訓的な本です。私は昨日一日中楽しみました、長いこと楽しんでなかったのに。もしもドストエフスキーに会ったら、私が彼のことを好きだと伝えて下さい。」

ドストエフスキーの存命中、「天才的な」という形容を与えられたのは長編『貧しき人々』だけであった。この作品は多くの批評家や読者たちを感激させた。愚かで、文化的ではなく、教養のない役人がヴァーレニカとの手紙の中で言葉の才を賜り、主人公は作家となり、批評家たちとパロディー作家たちはドストエフスキーを天才と呼んだ。長編『貧しき人々』は多くの点で、理解されておらず、読解し尽くされていない作品であり、人間の中の人間を養う力のあるものである。

にもかかわらず、ドストエフスキーに栄誉をもたらししたのは小説群ではなく、『作家の日記』であり、それは彼のどの傑作にも相当する価値がある。批評家たちは『作家の日記』を社会政治評論の作品と見なしている。『作家の日記』には社会政治評論もあれば、批評もあり、回想録もあるが、作者はそこに芸術作品を創ろうとしたし、創り上げたのだ。『作家の日記』の発見はまだ未来にひかえている。これが遠くない未来のことであると期待している。このように、ドストエフスキーの傑作群の総数をどれだけ増やそうとも、偉大な長編群は五つのみである。他の長編の資格については議論することができても、五書については議論の余地のないものである。

世界の他の多くの国と同様に、ロシアにおいては、^ラ長編小説は翻訳によって出来た叙述のジャンルである。ロシア文学には長編が出てくるまでは、年代記作家が語る中編小説^{ポエズエスチ}があつたが、そこで作家たちは軍の偉業を讃え、諸公の犯罪や信仰者たちの苦難に戦慄し、名門の出ではない、裕福ではない人間の運命の移ろいやすさに共苦した。中世にもビザンツの長編群の翻訳はロシア文学の中に稀ではあるものすでに現れていたが、ジャンルそのものは一八世紀に生じた。ロシア文学には、新しい主人公たちと出来事がやつてきた。読者たちはフランス恋愛小説の官能性、イギリス文学とドイツ文学の主人公たちの家族騒動、私的生活に仰天した。始めは中編小説と長編小説の詩学を区別するのは困難だった。それらの同義性と競合が典型的だった。ジャンルの分離が起きたのは、ロシアの長編小説が生じたときであり、中編小説は中編小説のまま残った。

ロシアの長編小説のイデー、コンセプト、発見はプーシキンによるものであり、彼は一八三〇年にこのジャンルを次のように定義した。「我々の時代には長編小説という言葉は、架空の叙述によって展開した歴史的时代のことを意味する」。創作においては、このコンセプトは彼によって長編小説『エヴゲーニー・オネーギン』(一八三三—一八三〇)において開かれ、レールモントフ、ゴーゴリ、ドストエフスキー、トルストイ等の長編小説によって発展した。

一九世紀に長編小説と中編小説は分岐した。中編小説は叙事詩の伝統的な特徴を保っていた。長編小説のオリジナルなコンセプトを提唱したのはミハイル・バフチンである。長編小説は叙事詩

的な距離感や絶対的な過去を壊し、長編小説の言葉の元素を創造した。長編小説の言葉は描写をしただけでなく、それ自身が描写の対象となるものとなった。長編小説の言葉は出来事記述であり、対話であり、多面的であり、部分的にパロディーである。

バフチンの批評家たちが正しくも示しているように、彼は長編小説とはいかなるもので「あったか」ではなく、長編小説はいかなるもので「ありうる」かを記述した。彼のコンセプトはドストエフスキーの後期の長編小説の分析を基にしている。この批評家の考察全てが議論の余地のないものというわけではない。バフチンはドストエフスキーの長編小説がポリフォニックなものであると主張し、イデオロギー小説であるという考えを否定した。バフチンは主人公たちのイデーのみを認め、それらが彼の長編群における描写の対象であると見なした。ボリス・エンゲリガルトは正しかった。つまり、ドストエフスキーの「主人公」となったのはイデーであり、彼はジャンルとしてのイデオロギー小説の作者である。ドストエフスキーにおいてイデーは、描写の原理であり対象である。ドストエフスキーはポリフォニックである。だが、バフチンの考えに反して、ドストエフスキーのポリフォニーは階層的であり、作者と作者の主人公たちが平等のではなく、主人公たちと語り手が「平等」なのである。バフチンは天才的に主人公たちの声を聴いたが、主要な声、つまりドストエフスキーの声を聴かなかった。

五書はこのドストエフスキーの声の啓示なのである。